



「あのレースは面白かったよな」ウサギはカメに言った。

「うん。気が付いたらボクが勝ったことになってて自分でも笑っちゃったよ。仲間が祝杯なんか上げてくれるって言うから本当のこと言い出せなくなっちゃってさ」

「オレはオレで仲間から馬鹿にされたよ。恥さらしだって」

「ごめんね」

「気にすんなよ、楽しかったじゃないか。それよりもうちちょっと水を足してくれよ」

気まぐれで始めたウサギとカメの競争は事実と異なって世の中に広まった。

カメはウサギを負かしたということによって「コツコツと努力することの大切さ」の象徴として地位を築いた。

ウサギは：ウサギは、しばらく旅に出た。

その日、ウサギとカメは丘の頂上まで競争をすることになった。そもそも何故そのようなことになったのか。ウサギが言い出したのだ。

「なあ、競争しないか？あの丘の頂上まで。たまには遊ぼうぜ」

「ギミが勝つに決まってるだろ。でも楽しそうだ。お互い運動不足だしね」

スタートして十分もしないうちに、ウサギは頂上に着いた。カメはまだ道のりの半分にも届いてい

ない。ウサギは走ってきた道を戻って、木陰で一休みしていた。やがてカメがそこにたどり着く。「頂上にも暇だからここまで戻ってきちゃったよ。お前も早くゴールしてここに来いよ。彼女との話でも聞かせてくれよ」

「さすがだね。もうちょっと待っててよ」

ウサギは横になりながら考えた。村で唯一の友達、カメのことを。

ウサギには友達がいなかった。性格が悪いわけではなかったが皮肉屋で、穏やかな性格が多いというのが評判の兎族では除け者にされがちだった。一方、カメは心が広く頭もよいので友達は多かったが、気を使い過ぎることがあった。

もうすぐ次の村長を決める村会議がある。カメが村長になれば、村はもっと良くなるだろうとウサギは思った。しかし次期村長の有力候補は兎族で一番毛並みの良い者だった。

「あいつも悪くはないけど、やっぱりカメが一番適任だろうなあ」

ふと、カメの方に目をやる。さっきから少ししか進んでない。ウサギは身体を起こすと村の方へ駆け出した。

ウサギは村の新聞社に行くところ告げた。

「カメがオレと競争するって言い出したんだ！笑っちまうよな！いつもの丘がゴールだ！今から五

分後にスタートするから、ゴール地点でオレがぶっちぎるところを撮ってくれよ！」
邪険に扱う村新聞の動物記者たち。

「なあ、最近ニュースがなくて暇なんだろ？頼むよ。見出しはそうだな：『ウサギに挑んだ愚かな
カメラ！』ってのはどうだい？」

捲くし立てるウサギに負けて、記者が重い腰を上げた。

村会議では先日のレースの熱狂も手伝って、カメラが村長に推され、ほとんど全会一致で決まった。

そのニュースを、ウサギは遠い地まで耳にして安心した。もうあの村には戻ることはないだろうと思
った。レースの記事は村の外でも話題になり、「おい、あの兎、新聞に載ってた間抜けな兎じゃな
いか？」という、兎族の耳の良さを知っててわざとよく聞こえるような声も何度か耳にした。それ
でも「おい、あの亀、新聞に載ってた英雄の亀じゃないか？」という声が、その何倍も生まれてる
のだらうと思うとウサギはそれが嬉しかった。

カメは村から全幅の信頼を得た。カメが考えた新しい決まりは村を豊かにし、平和をもたらした。それでも夜、ひとりになると泣きたくなかった。今、ウサギはどこにいるのだろうか。ふと空を見上げると、月が澄ましている。

「オレは餅つきなんか嫌いだよ」

そう笑っていたウサギの横顔を思い出しても、夜風がそれをさらっていく。カメは村の郵便局に行き、定年退職を来週に控えたペリカンを訪ねた。話を聞くとペリカンはその翼を大きく広げた。抜けかけた羽が目立った。

「わしの最後の仕事としては申し分ない。心配するな。この翼はいろんな風を知ってる。風だって事情を知れば手伝ってくれるさ」

そう言って玄関を出ると夜空に消えていった。大きな羽音だけが優しく、少しずつ小さくなっていった。

ウサギは自分の村の噂が届かないくらい遠くに来ていた。見上げた月が笑っている。風が冷たい。今夜はどこで眠ろう。狼に襲われないように目立たなくて風の当たらない場所を探さなくてはならない。どれくらい歩いただろうか。月灯りが独りぼっちの影を作り、夜がいつまでも眠らない。も

うそろそろこの辺で：そう思った矢先、影が消えた。いや、大きな影に包まれた。見上げると、両翼を誇らしく拡げて降りてくる見覚えのある顔。

「やっと思つたぞ。ここにいたか」

「ペリカンさん、どうしたのこんな所で？もうすぐ定年だろ？大人しくしてなよ」

「わしだって大人しくしていたいのはやまやまだがな、村長の頼みごとは断れんだろ」

村からだいぶ離れたこの地まで飛ぶのは若い者でも大変だった。ペリカンの息が上がっている。

「カメ：カメは元気なの？彼女とはうまくやってるのかな？結局聞きそびれちゃったんだよ」

「そんなに気になるなら自分の目で確かめに来い」

ペリカンはそう言つてウサギに手紙を渡した。恐る恐る手紙を開く。カメの字だ。短い文だった。

「キミと餅つきがしたい」

月が笑つていた。

おしまい。